

道内居住者にみるスキー場の選択条件

菊地 達夫*

キーワード：スキー場、道内居住者、選択条件、近接性、ゲレンデ変化

I. はじめに

長年、ウィンタースポーツの代表的なものとして親しまれてきたスキーは、大衆スポーツとして定着した。その活動の場であるスキー場は、スキーヤーの期待に添う努力を行い、一定の集客を定期的に得るまでになった。

しかしながら1990年代に入ると、各スキー場の経営は大きな転換を迫られている。その原因の一つは、スノーボードの登場である。1980年代から普及してきたスノーボードは、一般化するまでに、時間をやや要した。まずスノーボードは、操作性の似ているサーフィンやスケートボードを親しむ愛好者にいち早く好まれた。その後は、スキーを挫折した層や長年スキーをしてきた人たちにも関心を向けさせた。当初、スキー場の経営者は、スノーボード層の急速な増加に戸惑いをみせた。とくに、コースの全面開放については、スキーとの安全面を考え、すぐに開放されず一部開放する動きに留まった。また、古くよりスキーヤーの入り込みが多いスキー場は、伝統を重んじスノーボードに対するゲレンデ開放に消極的であった。しかしながら、ワールドカップやオリンピックの正式種目になったことを受け、スノーボードの増加は一層拡大した。現在、多くのスキー場はスノーボードを全面開放し、スノーボード専用のコース(ハーフパイプ)を増設するところもみられる。

道内スキー場のスノーボード受け入れは、一部にみられたものの、全体として全面開放や一部開放の動きは鈍かった。1990年代半ばを過ぎると、札幌や旭川周辺のスキー場でスノーボード層が急増し、利用者の過半数を占める光景が目立つようになった。

本稿の目的は、多角化するウィンタースポーツ

の拡大を受け、スキーを親しんでいる人たちが、スキー場選択の際、どのような条件を有するか解明することにある。これまで筆者は、スキー場分布・スキーツアーの提携・スキー場経営などの面から、道内スキー場の特性を明らかにしてきた(菊地, 1997, 1999)。スキー観光に関する研究は、地理学でも進められてきたが、その多くはスキー集落の形成やスキー場開発の展開といったものが対象であった。スキー場と集落の関係では、長野県野沢温泉・志賀高原・榑池高原を事例とした白坂(1986)の一連の研究、スキー場開発では長野県や新潟県のスキー場を対象とした呉羽(1995, 1997)の研究がみられる。スキーヤーの分析は、上記のような研究の中でスキー場の入り込み数の変化や宿泊者数の動向といった形で示されているにすぎない。スキーヤーの選定条件については、呉羽(1995, 1997)によって交通機関との関連により触れられているものの、それらはスキー観光地域を単位とした分析に留まっている。このことから、個々のスキー場レベルで選択条件を分析することは、一定の意義があると言えよう。

具体的には、道内に居住する大学生を被験者として選び、さらにスキー場の利用頻度が高いと判断できるスキーヤーを抽出した。次に、「日頃よく行くスキー場」と「行ってみたいスキー場」の傾向を明らかにし、どのような因子を選択条件としているか検討を加えた。大学生を被験者とするのは、ウィンタースポーツを行う関心が高い層であり、それらの活動機会に恵まれていると考えたからである。なお、被験者の属性は次章で述べる。

II. 被験者の属性

分析対象とする学生50名は、10回以上道内ス

スキー場を訪れた経験をもつ。回数の換算は、個人に任せたので自分の意志と関係ないスキー授業で10回を数えるという学生も若干みられる。さらに、1回という捉え方は、日帰りの場合と宿泊を伴う場合に区別でき、多少曖昧な点も認められる。しかしながら、概ね10回以上の経験を持つ被験者は、スキーに対する好感を程度の差はあれ、持っている判断できよう。筆者の経験から、抽出した利用頻度の多いスキーヤーに対して、①スキーに対する好感がある、②複数のスキー場を訪れた可能性が高い、③スキー場を選ぶ際、何らかの選定条件がある、という仮定をした。1・2回程度の経験では、スキーを楽しむという段階にないため、スキー場の選択条件を明確化できないと考えられる。

被験者の居住地は、下宿・自宅を問わず岩見沢・江別・札幌などに位置し、その大半を札幌で占めている。岩見沢や札幌圏¹⁾は、積雪寒冷地でありスキーを手軽にできる環境にある。また、多くの被験者は、札幌圏に長年居住していたことから、学校教育でスキー授業を体験してきたと考えられる。被験者のスキー場への来場回数は、100回以上が約50%、50回以上が約30%、50回未満(10回以上)が約20%となっている²⁾。中には、スキー授業とプライベート併せて1000回以上におよぶものもみられ、一般的にスキー経験度はかなり高いと言える。

被験者のうち、スノーボードを行うと回答したものもみられた。しかしながら、スノーボードについては、来場回数10回未満にほとんど留まっており、スキーへの指向性に偏っている。

III. スキー場選択のアンケート結果

ここでは、3つのアンケート結果を整理する。アンケートは「どのスキー場によく行きますか」(以下質問1とする)と「行ってみたいと思うスキー場を3つ程度あげてください」(以下質問2とする)とし、前者では3つのスキー場まであげることが可能とした。後者では選定条件となる主要因を記述させ、以前に来場したスキー場も含むとした。最後の質問は、「道内スキー場に望むことを具体的に書いて下さい」(以下質問3とする)というものである。

表1 質問1における回答結果

スキー場名	所在地	回答者数(人)
手稲ハイランド	札幌市(石狩支庁)	13
札幌国際	札幌市(石狩支庁)	13
ルスツリゾート	留寿都村(後志支庁)	12
藻岩山市民	札幌市(石狩支庁)	11
萩の山市民	岩見沢市(空知支庁)	9
キロロリゾート	赤井川村(後志支庁)	8
手稲オリンピア	札幌市(石狩支庁)	7
MTレースイ	夕張市(空知支庁)	6
朝里川温泉	小樽市(後志支庁)	5
ばんけい	札幌市(石狩支庁)	4
藤野	札幌市(石狩支庁)	4

資料) アンケート調査より。

注1) 質問1の内容は、「どのスキー場によく行きますか」。

注2) 複数回答あり。

注3) 回答者1名のスキー場は省略。

質問1の結果では、「札幌国際」と「手稲ハイランド」の2つのスキー場がともに13名で最も多い。ついで、「ルスツリゾート」の12名、「藻岩山市民」の11名となっている(表1)。「ルスツリゾート」以外の上位3つのスキー場は、いずれも札幌市内に位置するスキー場であり、居住地(札幌圏)との距離は近い。加えて、少数回答であったスキー場も概ね札幌市内および近郊に位置する。極少数みられた札幌近郊以外のスキー場は、そのほとんどが帰省先周辺に位置するスキー場と推測される。よって、被験者の回答からスキー場の選択条件は、居住地との近接性を示している。菊地(1997)でも指摘したように、日常生活の中で午前・午後・夜間といった部分的なスキー行動を可能とするのは、居住地に近いスキー場の存在である。

質問2の結果では、「ルスツリゾート」が25名で1位、「ニセコ」が21名で2位、「キロロリゾート」と富良野が11名で3位であった(表2)。なお、ニセコについては、ニセコと呼称するスキー場は7つ³⁾におよび、ここでは主として「ニセコひらふ」・「ニセコ東山」・「ニセコアンブリ」を指すものと考えた。よって被験者の数値は、3つのスキー場全体と1つのスキー場のみに考えられ、単独のスキー場の場合、数値はやや減少する。これら3つのスキー場は、コース数などに相違がみられるものの、山間部で各スキー場を自由に横断することができ、最長滑走距離もほぼ同じである。

表2 質問2における回答結果

スキー場名	所在地	回答者数(人)
ルスツリゾート	留寿都村 (後志支庁)	25
ニセコ	ニセコ町 (後志支庁)	21
	倶知安町 (後志支庁)	
キロロリゾート	赤井川村 (後志支庁)	11
富良野	富良野市 (上川支庁)	11
札幌国際	札幌市 (石狩支庁)	9
MTレースイ	夕張市 (空知支庁)	7
手稲ハイランド	札幌市 (石狩支庁)	5
萩の山市民	岩見沢市 (空知支庁)	2
小樽天狗山	小樽市 (後志支庁)	2

資料) アンケート調査より。

注1) 質問2の内容は、「行ってみたいと思うスキー場を3つ程度あげてください」。

注2) 複数回答あり。

注3) ニセコ町は、ニセコひらふ(倶知安町)・ニセコ東山(ニセコ町)・ニセコアンヌプリ(ニセコ町)の3スキー場を含む。

注4) 回答者1名のスキー場は省略。

選択された上位のスキー場は、道外からの入り込みが多いリゾート系スキー場である。これらのスキー場をあげた要因をみると、コースの多様性や滑走距離の長さ、雪質の良さといった内容を指摘している。また、こうした意見は、来場経験をもつスキーヤー(リピーター)より得られている。

質問3の回答では、大別すると料金に関わる意見と施設に関わる意見が得られた(表3)。最も多い意見は、リフト料金の値下げに関する内容である(9名)。被験者が学生であることを考えると、妥当な意見と受け止められる。近年、工夫を施すリフト券は散見されるが、料金そのものは値下げしていると一概には言えない。2番目に多い意見

表3 質問3における回答結果

主な回答項目	回答者数(人)
リフト料金の値下げ	9
リフト数の増加・高速化	8
スノーボードとの安全対策強化	7
休息施設の充実	4
交通機関の充実	3
アミューズメントパークの併設	2

資料) アンケート調査より。

注1) 質問3の内容は、「道内スキー場に望むことを具体的に書いてください」。

注2) 記述内容がほぼ同じものは、1つの項目にまとめている。

は、リフト数の増加および高速化に関する内容である(8名)。これは、リフト待ちの混雑を解消してもらいたい不満を中心とする意見であった。リフトの高速化は、一部のリゾート系スキー場で積極的に進めているものの、道内で低速なリフトは依然多く残っており必ずしも進んでいると言えない。道内で地方自治体が管理するスキー場は多く、施設拡充の予算化ができるところは少ないと判断できる。3番目に多い意見は、スノーボードとの安全対策強化に関する内容である(7名)。スノーボードとの安全対策は、互いの操作の面で大きく異なるため、以前より指摘されている問題であった。しかしながら、それぞれの専用コースを設けるところは依然少なく、混在する形が続いている。

その他の意見として、センターハウスやレストランなどの休息施設や交通機関の充実を求める声がみられた。

IV. 考察

本章では、第III章で得られたアンケート結果から内容を考察する。菊地(1997, 1999)で明らかにしたように都道府県の中で最もスキー場数が多い北海道の場合、一部のリゾート系スキー場を除き利用者は、地域住民を対象としている。その要因として、①ナイター設備の強化、②スキー場周辺に宿泊施設が少ない、③地方自治体管理によるスキー場が多い点を指摘した。質問1の場合、上位のスキー場をみると、ナイター設備を有する一方で宿泊施設を伴うところは少ない。この結果より被験者は、日帰りスキー行動を意識していると判断できる。すなわち、日帰りスキーを可能とするスキー場は、居住地から近くに位置することを条件とする。しかしながら細かくみると、これらのスキー場は、札幌市内で比較的規模が大きいスキー場であり、難易度の高いコースを有している。このことから、被験者の選定条件は、居住地との近接性を重要としながらも、ゲレンデ変化に富むスキー場も視野に入れておりと解釈できる。

質問2の場合、選定条件は近接性よりゲレンデ変化の方が増している。すでに述べたように被験者の意見をみると、コースの多様性や滑走距離の長さ、雪質の良さをあげ、これらはリピーターの記述内容から得られている。すなわち、この要因

をみる限り、先にあげた「日頃よく行くスキー場」は、必ずしも十分な満足は得られていないと判断できる。上位のスキー場は、いずれもリフト数やコース数が卓越しておりゲレンデ変化に富んでいる。

しかしながら質問2の結果を細かくみると、上位のスキー場は、札幌圏から自家用車で2～3時間程度の所要時間のところに位置する。これは、質問1同様に日帰りスキー行動を意識していると判断できる。同じような規模にあるリゾート系の「トマム」や「サホロ」といったスキー場は選ばれていない。これらのスキー場は、札幌圏から5～6時間程度の所要時間を必要とし、日帰りスキー行動として適さない。日帰り圏に位置するスキー場を選択していることは、居住地との近接性もある程度選択条件としていると判断できる。

もう一つ注目したいことは、ゲレンデ変化として「雪質の良さ」をあげた点である。道外のスキーヤーからみると、この要因は不思議であろう。しかしながら北海道と言えどもスキー場は、3月になれば雪解けが進み、とくに都市近郊に位置するところはクローズが早い。また、都市近郊の多くのスキー場は、3月中旬になると湿雪に変わり粉雪の状態を維持できない。このことから雪質は、都市近郊と遠方のスキー場で大きく異なる。

質問1と2の結果より、選定条件となった近接性やゲレンデ変化は、スキーヤーにとってどちらも重要な因子と判断できる。加えて、この選定条件は、質問1と2の回答より日帰りスキー行動を意識したものと判断できる。選定条件の記述内容から、宿泊に関するものは確認できなかった。よっ

て、道内居住者のスキー行動は、日帰りスキーの傾向が強いと確認できた。

次に質問3の回答意見は、特定のスキー場に対するものではなく、道内の全スキー場に該当するものであった。最も多かった意見のリフト料金は、個人・グループといった客層に関係なく一致している。交通費や食費といったものは、客層のニーズに合わせた計画ができる。それに対して、リフト券購入は、スキー技術能力とスキー行動時間を考慮することから、必ずしも低料金のリフト券を求めない。例えば、スキー場で最も安価な1回券のみを求めるようなことはあまりしないであろう。こうしたことを考えると、リフト料金に関する内容は、被験者(大学生)に限らずスキーヤー全体の要望と位置づけることができよう。また、スノーボードとの安全対策強化は、依然としてコース上の区分が十分でないことを示唆している。安全対策は、スキーヤーからの意見が中心であり、スノーボーダーのゲレンデマナーなどに対する改善を期待したものである。最も事故の発生原因となるコース上でのボードの脱着は、大きな問題となっている。

V. 結びとして

本論では、道内居住者とりわけ大学生を中心としたスキー場の選択条件について分析した。その結果として、以下のようにまとめることができる。

①「日頃よく行くスキー場」は、居住地(札幌市内)から近い距離に位置し、スキーヤーの満足度が最低限得られるところである。これらのスキー場は、札幌都心部より概ね30分～1時間程度

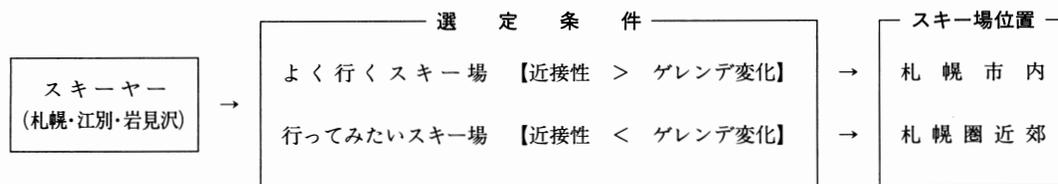


図1 道内居住者にみるスキー場の選択条件(概念図)

注1) 不等号は選定条件のより高い因子を表す。

注2) 近接性は、居住地を札幌圏とした場合に成立するスキー場との距離の関係。

注3) 札幌圏近郊とは、主として石狩支庁・後志支庁・空知支庁南部・胆振支庁に位置するスキー場を意味する。

で到着できる。代表的なものとして、「札幌国際」や「手稲ハイランド」や「藻岩山市民」スキー場があげられる。

②「行ってみたいと思うスキー場」は、都市近郊からやや離れた（札幌圏近郊）コースの多様性や滑走距離の長さや雪質の良さといったゲレンデ変化を有するリゾート系スキー場である。しかしながら、リゾート系スキー場を指示しながらも、アフターサービスや都市的サービスの提供を要因とするリゾート気分を味わいたいスキーヤーは極端に少ない。選定条件は、ゲレンデ変化に優位性があるものの、日帰りスキー行動ができる点も重要な因子としている。代表的なスキー場として、「ニセコ」・「ルスツリゾート」・「キロロリゾート」などがあげられる。

③スキーヤーの求める意見は、リフト料金の値下げやリフトの増加・高速化、滑走安全対策といったことに関心が集まった。

④アンケート結果では、「ルスツリゾート」において被験者を最も満足させる可能性が高い。

謝 辞

本論の資料は、平成11年度北海道教育大学岩見沢校で非常勤講師として「地誌学」を担当した際に、アンケート調査（スキー観光）を行った内容である。調査に協力してく

れた地誌学受講生諸君に、記して感謝したい。

注

- 1) ここで言う札幌圏とは、札幌市に隣接する小樽市・石狩市・江別市・北広島市をさす。
- 2) スキー場への来場回数は、100回以上の場合は毎年10回程度、50回以上の場合は毎年4～5回程度、50回未満の場合は毎年2～3回程度の利用頻度ではないかと推測できる。とくに、道内居住者の場合、スキー開始はスキー授業との関連より遅くとも小学校入学までと考えられる。
- 3) ニセコ山系には、リゾート系の「ニセコひらふ」・「ニセコ東山」・「ニセコアンヌプリ」に加え、中小規模の「ニセコモイワ」・「ニセコワイス」・「ニセコチセヌプリ」・「ニセコいわない」の7スキー場が分布する。

参考文献

- 菊地達夫(1997)：本州との比較からみた北海道のレクリエーションスキーの特色とその地域性，北海道地理，72，33-42。
- 菊地達夫(1999)：北海道におけるスキー場の立地特性，北海道地理，73，69-78。
- 呉羽正昭(1995)：新潟県湯沢町スキー場開発の進展，愛媛大学法文学部論集文学科編，29，135-155。
- 呉羽正昭(1997)：長野県におけるスキー場開発の進展，山岳文化の未来，102-111。
- 白坂蕃(1986)：『スキーと山地集落』明玄書房，159ページ。

Factors to Select Ski Areas by Residents in Hokkaido

Tatsuo KIKUCHI*